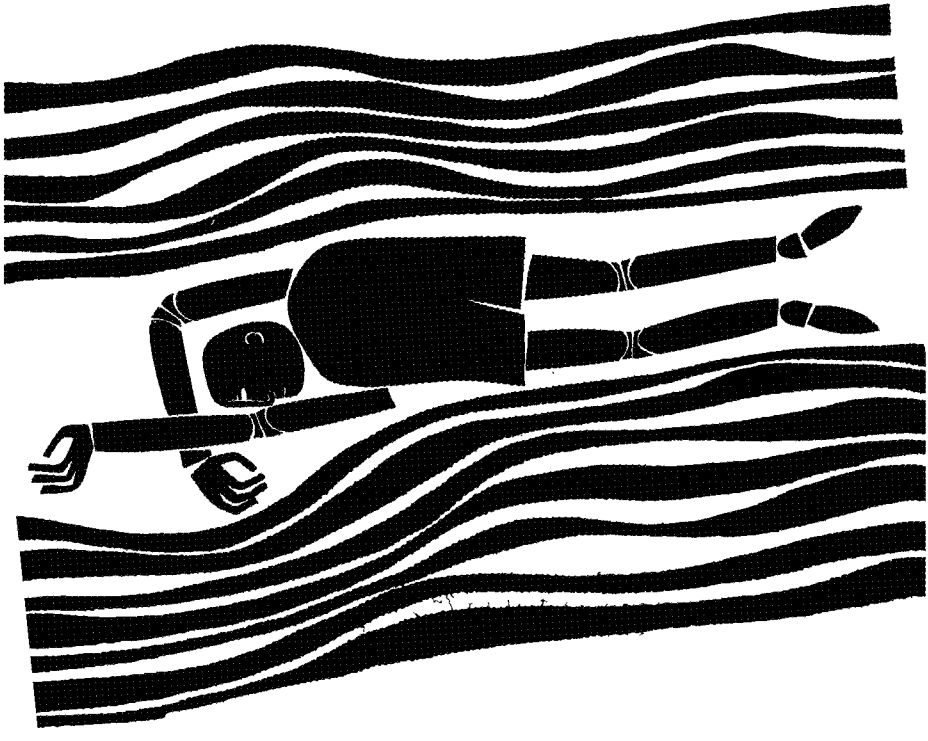

翳った砂丘　笹沢左保

講談社版

翳った砂丘

著者との
話合いにより
検印廃止

昭和三十七年十一月二十五日第一刷発行
二九〇円
著者　笹沢左保
発行者　東京都文京区音羽町三ノ一九　野間省一
印刷所　東京都文京区大塚坂下町一一四　豊国印刷株式会社
発行所　東京都文京区音羽町三ノ一九　株式会社講談社
振替東京三九三〇
電話東京(九四〇)大代表三一一一
(製本　大製)

© 笹沢左保　一九六二

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

第一章　消息の糸……五
第二章　裸身……三六
第三章　砂丘にて……七〇
第四章　砂の糸……一〇四
第五章　亀裂……一三九
第六章　有馬温泉……一六四
第七章　恐怖の起点……一九七
第八章　翳りの道……二三〇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

翳った砂丘

装幀　稲垣行一郎

第一章　消息の糸

1

Mデパート外商部長須藤丈治は、二十日間の出張期間が過ぎても帰京しなかった。Mデパートの幹部たちの間でこのことが話題になり、総務部長名で、須藤丈治が回ったはずの各地方支店に問い合わせの連絡文書が送られたのは七月三日火曜日である。

須藤丈治の出張目的は、地方支店の外商関係営業状況視察であった。日数は約二十日間の予定で、六月五日に東京を発った。横浜を皮切りに、静岡、名古屋、京都、大阪、神戸、岡山、広島、下関、の各Mデパート支店を回るというスケジュールだった。

須藤丈治から東京日本橋のMデパート本店には、三度ほど電話がかかっている。いずれも出張先の支店から、何か変ったことはないか、という職務上の責任電話を寄越したのである。六月十二日に名古屋から、六月十七日に大阪から、六月二十二日に広島から、であった。最後の広島からの電話の時には、あと残すところは下関だけだから、二十六日には帰京出来るだろ

う、と外商部第一係長に言ったという。つまり、須藤丈治は六月二十六日には帰京する意志でいたというわけだ。帰りに私用で寄り道してくるような予定はなかったと言っていい。

Mデパート本店の上層部でも、六月一杯までは須藤丈治が帰京しないことを、それほど気にとめてなかったのである。長期出張であれば、五日間ぐらいの期間ずれは仕方がないことだし、最初からその程度の期間の余裕はとってあった。

だが、七月十日にはMデパートの臨時株主総会が開かれる予定だった。その準備もあって七月に入ったら、外商部長には当然本店にいてもらわなければならなかったのだ。六月三十日になって、須藤丈治が未だに帰京していないと知った本店上層部では、ようやく憂慮し始めたようだった。

しかし、それでもまだ須藤丈治の失踪とか死亡とかいう最悪の事態を予想したわけではなかった。帰京の途中、どこかの温泉にでも寄って休養をとっているのではないか、という想定のもとに、須藤丈治の暢気さかげんを責める声が囁かれたりしていた。

七月三日になって、須藤丈治の探索が決定されたのは、彼の家族からの申し出によってであった。須藤丈治の妻から、警察に捜索願を出すと言って来たのである。Mデパート上層部は大いに慌てた。

広範囲を対象とした客商売であるから、デパートというところは銀行に次いで世間体を重視する。よく言えば信用を重んずるのだが、悪く言えば世間の目を胡魔化すのである。従って、デパート内部のことを表沙汰にするのを極度に恐れる。警察にタッチされることなど、もってのほかだった。あくまでも、内部だけで握りつぶし処理をすませたいのだ。銀行が行員の不正行為を警察に知らせないで、行員を処分することによって揉み消そうとするのに似ている。

須藤の妻は、Mデパート本店の人事部長にこう言って来た。

「須藤はとても几帳面な性格です。出張先から、わたくし宛に手紙をキチンと書いて寄越しています。静岡、名古屋、京都、大阪、神戸、岡山、広島から、それぞれ速達で手紙が来ております。ところが広島からの速達を最後に、プッツリと便りが届かなくなりました。何かあったのだ、と考えるほかはありません。警察に捜索を頼んでみようと思います。どこかに寄り道しているならば、そのように手紙を書いて来るはずです」

Mデパート本店の人事部長は、出張先へ問い合わせてみるからそれまで待ってくれ、と須藤の妻をとりあえず宥めておいたが、もう一刻の猶予も許されない状態だった。そこで総務部長名で各支店へ、須藤丈治の到着日時と出発日時、それに須藤に不可解な言動がなかったかどうか、の二点について照会文書が送られたわけである。電話ではなく文書で連絡がなされたのも、「部外秘」を強調するためだった。

各支店からは折り返し、回答があった。それによって、須藤丈治の行方不明が思ったより重大な意味を持っていることが分かった。須藤は任務を果して寄り道でもしているのだろうという想定は、完全に否定された。須藤はまだ、その出張任務を最後まで果しきっていなかったのである。

各支店からの回答によると、到着と出発の日時には矛盾がなく、一応は出張コースと符号していた。須藤に不可解な言動がなかったかという点については、どの回答も「特に気がついたことはない」と記されてあった。

しかし、下関支店からの回答だけは違っていた。「須藤部長は未だに当支店へは到着しておりません」と、下関支店からの回答にあるのだ。広島支店からは「須藤部長は六月二十三日に

当地を出発、下関へ向かった」と言って来ている。だが彼は、その下関には姿を現していないのだ。須藤丈治は、六月二十三日広島を発って、それっきり消息を絶ったわけである。もはや、楽観的な予想や推測は許されなかった。

出張任務を了えずに消息を絶ったということになれば、私用でどこかに寄り道していると考えるわけには行かなかった。外商部長ともあろう須藤丈治が、そのような無責任な行動をとるはずがない。従って、須藤丈治が行方をくらまさなければならない強制力を持った何かに遭遇したと考えるべきだった。彼の意志によってではなく、不可抗力の作用により消息を絶ったのだ。

須藤外商部長の失踪の噂は、やがて一般の社員たちの間にも広まった。売場の店員、事務系統の社員、と若い女の多いデパートではこうした情報の蔓延が早かった。

特に外商部では、この噂でもちきりだった。直属上司の失踪事件は、職場に異様な興奮をもたらすほどの衝撃的な話題だった。

Mデパートの客の混雑ぶりは相変らずである。地階から八階、そして屋上まで、群集がまき起す音とならない騒音、スピーカーが流す音楽とご案内、豪華な装飾、積み上げられる札の山――と、表面的には息苦しいほどの活気と華やかさに充ちている。それだけに、客は一人として知り得ない、こうした裏面の事件が異常感を高めるのである。

外商部の仕事は、デパート機構の中では最も行動的であった。というより、一般の会社業務に近いのである。外商部は大別して、対官庁、対民間会社、対家庭と繋りを持っている。対官庁会社の仕事は、中元、歳暮、記念品などの贈答を売掛けによって受け持つ。対一般家庭の場合は、クーポン、信販、進物などを扱っているのである。外商部員たちは、いずれも若い。仕

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

事に対しても意欲的だった。という点でも、彼らは部長の失踪を真剣に憂慮せざるを得なかったのである。彼らは、単に噂話としてではなく、部長の行方不明について話し合った。話し合ったところで、何の結論も出ないことは分かっている。しかし、それでも話題にしていなければ落ち着けないのだ。直属上司を失うことは部下たちにとっては打撃であり、またそれだけ須藤丈治が信望を集めていた部長という証拠でもある。

外商部商事係の初音江津子も、その一人であった。初音江津子は、須藤が六月二十五日を過ぎても本店に姿を見せない、と気がついた頃から、すでに暗い予感に捉われていた。と言っても、別に彼女が今日の事態を予想していたわけではない。もっと単純な情感から初音江津子は、須藤丈治の身を案じていたのだ。

「二十日間ばかり出張に出ることが決ったよ……」

六月三日の夜、向島の「鈴川」という料亭で須藤丈治からそう聞かされた時、初音江津子は締めつけられるような痛みを胸の奥に感じた。別離を宣告されたような心細さと驚きが江津子の動悸を高めた。

「そんなに長く……?」

「あゝ。九州四国を除いた関西中部の全支店を視察するんだからな」

と、須藤は白い歯を見せて、安心させるつもりか、江津子の肩を軽く叩いた。

「二十日も会えないんですか……」

江津子は項垂れて呟いた。須藤と特別な関係になってから、二十日も彼の顔を見なかったことは、まだ一度もなかった。二十日も会えない——と聞いただけで、江津子はすでに須藤が傍らにいないような寒さを身体の周囲に感じた。

《彼を本当に愛しているんだな……》
と、江津子は改めてそう思った。
一度か二度、出張先へ呼んで——と頼んでみようかとも考えたが、江津子はそれを口には出さなかった。須藤は公私の別をはっきり区別する性格である。そんなことを頼めば、甘えすぎるとたしなめられるのが関の山だった。叱責された時の寂しさを恐れて、江津子は口を噤んだ。
「二十日ぐらいは、あっという間に過ぎるものさ」
須藤は浅黒い顔を綻ばせて、鷹揚に笑った。この須藤の温か味のある抱擁力と、その反面仕事に打ち込む時の冷酷なまでの厳しさ——それが、この三十八歳の男の激しい吸引力となる魅力だった。
江津子が須藤と結ばれたのは、去年の秋である。結ばれたというより、江津子の方から身体を投げ出して強引に関係を迫ったというべきかも知れない。
江津子は二十一歳でMデパートに就職した。二年ほど総務部にいて、去年の春の人事異動で外商部商事係に配属になったのである。外商部商事係には、女子係員が江津子一人きりいない。席が部長席に近かったせいもあって、お茶汲みからちょっとした用たし、ハンカチの洗濯ぐらい、江津子が須藤の身の回りの世話をやくようになったのは当然だった。
最初のうちは、二人は単なる部長と女子事務員の間柄だった。須藤は江津子を、便利な道具ででもあるように扱った。江津子は須藤に対して、活動的でスマートな壮年部長で魅力がある、という好感は抱いていた。だが、それ以上の感情はなかった。妻子もあり、Mデパートの有能な若手幹部という須藤を、高嶺の花としてとても恋愛感情の対象としては考えられなかったのである。

こんな二人が、ふと上司と部下という観念を解いた上で互いを意識したのは、去年の秋江津子がいたたまれないような中傷を受ける破目に陥った時のことがキッカケだった。

江津子が全くの中傷に泣いたのは、三流実話雑誌に載った彼女の写真が原因だった。その写真がいつどこで撮られたものかは分からないが、とにかく写っているのは江津子に違いなかった。

「コール・ガールの正体は、デパートの店員だった」というタイトルの実話記事と称するページに、江津子の写真がカット写真として使われていたのである。しかも、その写真は一目でMデパートの従業員通用門と分かるバックで、事務服姿の江津子が写っていた。写真の下には「誘惑に勝てなかったと告白する東京Mデパート本店の店員安川道代さん（仮名）」と添え書きがしてあった。

このことは事実の有無を問い合わせて来た週刊誌読者の投書によって、Mデパート上層部の耳へも入った。勿論、噂は確定的な事実ということにされて、一般従業員たちの間にも伝染して行った。江津子は、人事部長の呼び出しを受けるまで、なぜ同僚たちが好奇と侮蔑の目で自分を眺めるのか、不思議でならなかったくらいだった。

Mデパートは、江津子を馘にするつもりであった。コール・ガールというような事実はなかったとしても、そうした記事に利用されるのは、江津子の服装や化粧、そして人に与える印象に良家の子女とは思われないものがあるからだ、というのである。

江津子には、確かにどことなく崩れた印象があった。それは弾力のありそうな肉附きに厚味のある肢体が、肉感的であるからかも知れなかった。澄みきった目ではなく、情熱的に大きな瞳、そしてふっくらとした厚い唇なども、彼女を清楚な娘という感じにはしてなかった。同じ

美貌でも、女が羨望するような美しさではなく、江津子のそれは男が想像の中で裸にしたがるような、そんな魅力であった。

普段は無口でも、性格は勝気で、行動にも積極的だという点が、一層江津子を好き者のような感じにしていた。化粧も濃いし、服装も思いきったものを着る。ある意味では、人事部長の考えはもっともだと言えた。だが、江津子はそんなことで辞めさせられることを、どうしても承知出来なかった。彼女は口惜しさに半ば逆上気味で、須藤にこのことを訴えたのである。

「初音君を辞めさせることは、週刊誌の記事が事実だったと認めるのも同じです。あなたは自ら進んで、Mデパートの信用を失墜させるつもりですか？」

須藤は今でも語り草とされている、強硬な談判で、人事部長の江津子処分案を撤回させたのだった。

須藤が救ってくれた、という気持が間もなく江津子を甘えさせる結果となった。自分の庇護者と思えば、女はその男に特殊な感情を抱くものである。江津子は須藤を、部長であると同時に男として意識し始めた。好感は恋情に膨脹した。そして江津子は去年の十月、某電機会社の庶務課長を招待した宴会のあとで、「鈴川」の離れで須藤の抱擁を求めたのである。

「部長さんは、わたくしに冷たいわ。探るような目でわたくしを見るの。部長さんも、わたくしを何かふしだらな女だというふうに心のどこかで思っているんだわ。そりゃ、わたしだって処女じゃありません。でも、結婚したいっていう言葉に溺れて二度ほど、相手の男に許しただけなんです。嘘じゃないわ。わたくし、部長さんが好き！　試して欲しいわ！　わたくしがそんな女じゃないってこと、わたくしの身体で知って下さい！」

お酌の際に強制的に飲まされた酒の勢いもあって、江津子は体当りするように須藤の胸に縋

ったものだった。
「そんな目で君を見ちゃあいないよ。ぼくは君が眩しいくらいだった。ぼくは自分の理性が腹立しかった……」
須藤はそう口走って、江津子を抱いた。
須藤と江津子の関係はそれ以来のものである。二人は週に三度は、この「鈴川」へ来た。たまには泊って行くこともあったが、例え数時間だけの逢う瀬だったとしても江津子は不満を感じなかった。違う家へ帰るという苦痛があるからこそ、二人だけの時間が貴重にも感じ、また充実もしていた。
二人の間では、あまり将来のことは語られなかった。須藤は言いわけがましいことを口にしないし、また江津子の方から結婚について話を持ち出す筋合でもなかった。これから先も、今のようであれば、それで江津子は満足だった。将来への夢よりも、現在の二人の時間の方が大切であった。それだけ、二人の気持が密着していたのかも知れない。江津子は妻の座というものに、それほど固執していなかった。与えてくれるというなら拒みはしないが、少なくとも結婚ということを、須藤との関係で取引きしたくはなかった。真実愛しているならば、結婚とか妻の座とかいうものは不必要ではないか——と、江津子には若い女なりの自己満足があった。
事実、現状を維持するだけで江津子は充分幸福だった。須藤の妻に対しては、むしろ無関心であった。嫉妬も感じないし、罪悪感もない。須藤の妻と自分とは別の世界にいて、須藤が彼の妻の世界にいる時は忘れ、自分の世界に来てくれている時だけの彼を愛すればいい、と割り切っていた。
須藤が妻よりも江津子の方を愛している、ということには自信があった。それは、須藤が江

津子の身体を求める度数によっても量ることが出来た。須藤が江津子との時間を持つのは、殆んど一日おきであった。三十八歳の男性が、江津子を求めるのと同じように妻をもまた充たし得るだけの性交渉が持てるものではないことを、彼女は察していた。須藤の肉体は常に若々しく、新鮮だった。行為に辟易しているような疲れや鈍さを、江津子に示したことは一度もなかった。江津子は、須藤は妻との夫婦関係を最低の義務限度に抑えているのではないか、と思ったことさえあった。須藤が異常な精力家でない限り、そうとしか考えられなかった。

女の心理はそんなことからも微妙な作用をもたらした。須藤が自分だけに燃えてくれることが、江津子には何よりも嬉しかったのだ。江津子は須藤の肉体が萎えていないことを確かめては、熱い幸福感に酔った。江津子も自分の身体の芯に、小さな爆発といった陶酔感を覚えるようになった。これが本などにある、女の歓びというものなのだろうか、と江津子は身体中に汗をかき行為のあと睡気に誘われるようになった自分を、怖さ半分に考えた。江津子は須藤の生活の何分の幾つかを独占するだけで、それ以上を望まなかった。

須藤と江津子の関係は、誰にも知られていなかった。勤め先では、細かく気を配って、二人が特別な関係にあることを察知されないように、部長と事務員の体裁を保った。幸い外商部には男の社員が多いので、妙に探られるような視線は浴びなかった。二人の関係を知っているとしたら、それは「鈴川」の従業員たちぐらいのものだった。

須藤との関係を厳しく秘密裡に続けることも、江津子は大して不安に思わなかった。女は、男との交渉を必要以上に隠し立てすることを恐れるものである。男に捨てられた場合、それを非難するにも証人というものがいないという結果になるからだった。しかし、江津子は須藤に捨てられる時のことまで考えていなかったのだ。自分の方からは何も求めずに須藤に与えるこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com